頴原退藏
暉峻康隆
野間光辰
編

定本西鶴全集

第七巻

中央公論社版

昭和二十五年十二月五日　初版
昭和四十八年二月二十四日　七版

定本西鶴全集第七卷
定價金參千五百圓

編者　潁原退藏
　　暉峻康隆
　　野間光辰
發行者　山越豐
印刷者　東京都中央區京橋二ノ一　山田博
印刷所　東京都板橋區板橋町四ノ四七ノ七　株式會社三陽社
發行所　東京都板橋區板橋町四ノ四七ノ七　中央公論社
　　東京都中央區京橋二ノ一
　　振替口座東京三四番
　　電話(561)五九二一(代)

(小泉製本)

© 一九五〇年　中央公論社

目次

凡例……三
解說……五
日本永代藏……一五
卷一……一五
卷二……四一
卷三……六九
卷四……九五
卷五……一二三
卷六……一五一
世間胸算用……一七七
卷一……一七七

卷二……二〇三
卷三……二二七
卷四……二五一
卷五……二七五

西鶴織留……二九九

卷一……二九九
卷二……三三三
卷三……三六一
卷四……三八五
卷五……四一一
卷六……四三三

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

凡例

一、底本は原則として初版本によつた。

一、活字化にさいして、漢字假名ともに行草體は楷書に改めるを原則とした。但し當時通行の略字、異體字、宛字はもとより、誤字、脱字、假名遣ひ・振假名の誤り等は、すべて原本通りとした。

一、原本通りと斷つておいても、活字化のさいの誤植または校正の誤りと思はれる恐れのあるものは、できるだけ校訂註を加へることにした。

一、原本の句讀點は一定してをらず、同じ丁においても。と・を混用してゐる場合があるので、その多く使用してある方のいづれかに統一した。

一、原本の丁數は、これを各丁の終りに括弧によつて示した。（一オ）は卽ち一丁表、（一ウ）は卽ち一丁裏である。

一、挿繪の存するものはすべてこれを原本相當の個所に收錄した。また表紙、自筆の序・跋・本文、その他參考に資すべきものは口繪または本文相當の個所に掲げた。

一、頭註はスペースのゆるす限りにとゞめ、おほむね解讀に支障なきを期した。

一、本巻所收各篇の校訂・頭註は暉峻康隆がこれを擔當した。

解説

暉峻康隆

日本永代藏

大本六卷六冊。貞享五年（九月改元元祿元年・四十七歲）正月刊。序、署名、跋なし。題簽に「日本永代藏」、旁題して「大福新長者敎」とある。柱刻は同じく「大福新長者敎」。內題「日本永代藏」、ただし卷一の本文にのみ「本朝永代藏」とあり、卷二以下の本文には內題がない。卷末奧附に「甚忍記」全部八冊の近刊豫告がある。本文板下の筆者不詳、本文行數十三行、句讀點は白丸と黑丸の混用。挿繪は吉田半兵衞といふ。なほ各卷目錄の標題の上に、その家號を示す暖簾を描いてゐるのは、新しい趣向である。

右の書形を有する版本に三種あり、その一は「貞享五戊辰正月吉日」といふ刊年を中に、向つて右下に「京江戸書林、二條通麩屋町、金屋長兵衞。神田新革屋町、西村梅風軒」、向つて左下に「大坂書肆、北御堂前、森田庄太郎刊板」とある、いはゆる三都版であり、その二は三都版より江戸の西村の名を削つたもの、その三はさらに京都の金屋の名を削つた大阪の森田單獨版である。以上三種のうち、普通に三

都版を初版とし、京大阪版を再版、森田單獨版を三版と考へられてゐるが、實は森田單獨版が初版、三都版が再版、京大阪版が三版であらう。その理由は、京大阪版は三都版から「江戸　神田新革屋町、西村梅風軒」の十三文字を削つたあとがあきらかであり、しかもこれが最後の版であることは、文政七年七月に大阪の書肆文榮堂が「大福新長者鑑」と改題して求板再摺した六卷二冊本が、京大阪版の奥附をそのまま存してゐるからである。これまでのやうに、三都版を初版とし、順次その奥附から書肆の名を削つて、最後の三版が森田單獨版の形となつたとすると、その最後の版を求板再摺した文政七年の改題本の奥附もまた、森田單獨版でなければならないはずだからである。したがつて通說とは反對に、森田單獨版が初版、三都版が再版、京大阪版が三版、そしてその最後の京大阪版を求板再摺したのが、文榮堂版の「大福新長者鑑」といふことになる。ところがここに守隨憲治氏の「攷註日本永代藏」の解說によれば、大阪の書肆河内屋茂兵衞版の六卷一冊合綴本がある。これは京大阪版の板木を用ひ、別に河内屋を版元とする三都合版の奥附があるといふ。とすると三版である京大阪版と文政七年の改題再摺本との中間に位置する第四版といふことになり、森田單獨の初版本系統の版本五種が存在することになるわけである。もつとも私は森田單獨版を實見してゐないので、以上の出版順序を斷定することはできない。紙質や印刷の鮮明度が判明すれば、森田單獨版が最後の版といふ可能性も考へられるからである。

以上五種の初版本系統のほかに、板式をことにする異本がある。それは三都版の挿繪の構圖をそのま

ま彫り改め、本文は假名を多くした風本風な書體で十五行、內容も卷一江戶、卷二大阪、卷三西國、卷四東國、卷五近畿、卷六京都と、地理的に分類し、したがつて柱刻も卷一「江長」、卷二「大長」、卷三「西長」、卷四「東長」、卷五「近長」、卷六「京長」と改まつてゐる。この異版系に四種あり、その最初のものは、半紙本六冊（卷六のみの零本・天理圖書館藏）、奧附に「此跡ヨリ人ハ一代名ハ末代、甚忍記、仁義禮智信之部、全部八冊出來貳匁、板行仕候、貞享五歲辰ノ五月吉日、書林西澤大兵衞重刊」とある（日繪寫眞參照）。その二は半紙本六冊、奧附に「書林、大坂心齊橋筋、柏原屋佐兵衞」とあつて、刊年の記載はない。本文は西澤版と同じ。その三は大本六冊、前記の二版本と卷序の異同があるが、單に順序を改め、大本に仕立て直したもので、刊年・版元ともに不明。これが從來まんせんと江戶版と稱せられてゐたものであるが、西澤版と柏原屋版の發見によつて、いづれも大阪版であることが明らかとなつた。なほ柏原屋版は、野間光辰氏が寶曆十二年刊と推定されてゐるが、その後さらに卷末に「永昌堂板行書目」の廣告のある再摺本がある。

卷六の五に、「金銀有所にはある物、かたり聞傳へて日本大福帳にしるし、する久しく是を見る人のためにも成ぬべしと、永代藏におさまる時津御國靜なり」とある。すなはち「日本永代藏」といふ書名には、町人に町人のかくあるべき姿を示さうとする敎訓的意圖が藏されてゐるわけである。さらにまた

教訓的意圖は、「大福新長者教」といふ副題の存在によつて、一そう明らかなものとなる。いふまでもなく、寛永四年刊の舊「長者教」に對する「新長者教」の意である。「長者教」は横小本十七丁の小冊子で、貨幣經濟の發足期である中世末期に成立し流布してゐた寫本を、新興町人の指針として出版したものである。したがつてそれは、商業資本主義確立以前の、致富道における個人的修養を說いたものであつた。いま西鶴が「永代藏」を「新長者教」と名づけたのは、一世紀も前に書かれた「長者教」の著者のあづかりしらない新しい商業資本主義時代の長者教たるべきものといふ心からであつたにちがひない。しかしながら「永代藏」は、文藝として書かれた創作である。「世に錢程面白き物はなし」(卷四)といふ、金錢の世界に對する貪慾な作家的興味が全篇をつらぬいてゐる。「長者教」のやうに抽象的な教訓書ではない。燃燒の不足が目立つてはゐるが、具體的に全國にモデルを求めて描いた立身出世譚である。金錢と人間との世にも激烈な格鬪をリアルに描いた文藝作品である。したがつて「永代藏」は、教訓の書にあるまじき樣相を呈してゐる。商業ブルジョアジイの多くは、西鶴の期待に反して、惡德によつて榮え、しかも今や惡德をあへてする以外に、一代にして產をなすといふ町人大衆の夢は實現されうべくもないといふ、商業資本主義の固定にともなふ苛酷な現實を描き出してゐるのである。それは西鶴が觀念よりも現實を尊重する種類の作家であつたからにほかならない。「永代藏」を契機として、西鶴が次第に中流以下の町人大衆の暗い運命を凝視しはじめたのは、當然のなりゆきといふべきである。

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

世間胸算用（せけんむねさんよう）

大本五卷五冊。元祿五年（五十一歲）正月刊。自序に「難波西鶴」と署名し、「松壽」の方形印記をあらはす。跋なし。題簽に「世間胸算用」、旁題して「大晦日は一日千金」とある。內題「胸算用、大晦日は一日千金」、柱刻「胸算用」。本文板下の筆者不詳、本文行數十三行、句讀點なし。插繪は蒔繪師源三郎風といふ。初版奧附「元祿五壬申年初陽吉日、書肆、京二條通堺町、上村平左衞門。江戶靑物町、萬屋淸兵衞。大坂梶木町、伊丹屋太郎右衞門板行」、再版奧附「元祿十二己卯年八月吉日、書肆、大坂本町壹丁目、萬屋彥太郎板」。異本なし。

旁題して「大晦日は一日千金」といふ。すなはち收められた二十の短篇は、大晦日といふ時間的限定のもとに描かれてゐるのである。西鶴がかつて「大晦日定めなき世のさだめ哉」（天和二年刊・誹諧三ケ津）とよんでゐるやうに、日常の買物から問屋の取引きまで帳面一つですました封建社會にあつて、大晦日は一年の總決算日であつた。富める者も貧しき者も、この日の決算をどうにかして切拔けなくては、新しくはじまる明日からの生活に支障をきたすのである。さういふ經濟生活の最高潮に達する特定の時間

を用意して、西鶴は今や描かずにをれなくなつた町人大衆の悲喜劇を、もつとも効果的に描かうとしてゐるのである。このきはめて意識的な時の强調と統一は、窮迫せる中流以下の町人生活を對象とし、全國の主要商業都市を舞臺とすることによつて、きはめて近代的な集約的方法となつてゐるのである。

したがつて二十の短篇は、事件としてはそれぞれ無關係な人生の斷片でありながら、全體として我々はそこに渾然たる人生の縮圖を見ることができる。しかもそこに描かれてゐるものは、特定の個人の運命ではない。無名の大衆の運命である。だから特定のブルジョアジイをモデルとした「永代藏」や「本朝町人鑑」（織留）の主人公が、それぞれ姓名を有してゐるのに對して、「胸算用」の各章は特定の主人公を擁することなく、大方數名の登場人物によつて構成され、しかも彼等はつねに無名で、亭主、親仁、隱居、女房、內儀、婆、息子、商人、掛乞、手代、小者、貧者など、ただその年配や身分や性別をあらはす普通名詞を使用してゐるにすぎない。大衆の運命を大衆の運命として描かうとした結果、このやうな新しい方法を持つたのである。

かうして描かれた「胸算用」の世界は、當然のことながら、まことに暗い。金錢に醜弄され、生きるために手段をえらばぬ町人大衆のゆがんだ表情が生々と描かれてゐるのだが、それは悲劇的であるよりも、喜劇的である。人間のみじめさは、それが感傷をまじへず、的確に描かれた場合、喜劇的でありうることを我々は知つてゐる。しかし西鶴のさういふ態度が、片々たる美意識やモラルによつて人生を處

理しようとせず、やむをえざる町人大衆のみじめな生き方を、あるがままに受け入れようとする打開けた心境にもとづくものであることを忘れてはならない。「胸算用」は西鶴晩年の傑作であるのみならず、その精神において、その方法において、世界的古典の名に値する作品である。

西鶴織留

大本六卷六冊。西鶴の歿後七ヶ月目、元祿七年三月刊。卷頭に「松壽」の陽刻印をおした「難波西鶴」の署名と、「松壽」の陰刻印をおした「元祿其月其日」と日附の箇處を示した西鶴の自序、および「滑稽堂主」の陰刻印をおした「元祿七年戊卯月上旬、難波俳林團水誌」としるせる編者北條團水の序があり、跋はない。題簽はそれぞれ書體がちがふが「西鶴織留」、卷一と卷二は旁題して「本朝町人鑑」、卷三、卷四、卷五、卷六は「世の人心」。內題は卷一と卷二「西鶴織留本朝町人鑑」、卷三、卷四、卷五、卷六「西鶴織留世の人心」。——書體の相違は本文について見られたい——柱刻は通じて「世の人心」。本文板下の筆者不明、行數十二行。句讀點は白丸。挿繪は蒔繪師源三郎風。奥附に「元祿七甲戌年三月吉日、江戸万屋清兵衞、大坂鳳金屋庄兵衞、京上村平左衞門板」とある。再版本は刊記をそのままにして團水の年記を削り、卷二の十三丁以下二十丁終までおよび卷四の五丁裏から十六丁裏まで、

初版本を覆刻し、巻四「家主殿の鼻柱」の逆繪の水汲女を削つてゐる。第三印本は、右の再版本をそのまま再摺し、ただし刊記の半丁を改め「正德二壬辰年五月吉日、大坂書林、岩國屋德兵衞、大塚屋權兵衞、油屋與兵衞、開板」とある。第四印本は正德二年版をそのまま求板再摺したもので、巻末に求板版元・心齋橋筋吉文字屋市兵衞の廣告がある。以上四種を「織留」の現行本とする。

團水序に、「本朝町人鑑」二巻九章と「世の人心」四巻十四章は、元祿元年正月刊の「日本永代藏」とともに、三部作とする豫定で執筆しつつあつたが、半ば書きのこして世を去つたといふ。團水のこの言葉は、巻二の一に「本朝は天照太神元年より今元祿二年の初春まで」とある一節によつて、承認することができる。すなはち「永代藏」に引きつづき、元祿二年春刊行の豫定で執筆中絶したものであるが、とするとこれは、「永代藏」の巻末廣告に「此跡ヨリ人ハ一代名ハ末代、甚忍記、全部八冊、仁之部、義之部、禮之部、智之部、信之部、板行仕候」とあり、また同年五月の西澤版「永代藏」の巻末廣告に「此跡ヨリ人ハ一代名ハ末代、甚忍記、仁義禮智信之部、全部八冊出來貳匁、板行仕候」とある「甚忍記」に相當するものであらう。西澤版が出る頃、原稿も今見る形に近いものができてゐたので、定價まできめて豫告したものと思はれる。とくに「本朝町人鑑」二巻は、内容もまた「甚忍記」と稱するにふさはしいものである。思ふに西鶴は、「永代藏」の續篇として「甚忍記」の執筆に着手したので

あつたが、中途にして計畫を變更し、「本朝町人鑑」と「世の人心」の二部に仕立てることとし、「是を世の人心と名づけ」(卷頭自序)と、原稿の進んでゐた「世の人心」の方の序文を書くまでに至つて、中絶したのであらう。その未完の二部を、西鶴の死とともに京都からかけつけて、西鶴の故庵をまもることとなつた門人の北條團水が整理し、「難波のくれは鳥織留る物ならし」といふ西鶴自序の文句をとり、「西鶴織留」と名づけて出版したのである。

この未完の二部は、まさしく「永代藏」で發見した苛酷な現實に對處せんとして書かれたものであつた。しかしもともと思索的であるよりも行動的な彼の創作態度は、いたづらに混亂し、自己分裂を露呈し、あげくの果ては造型の意志を見失ひ、隨筆となつてしまつてゐるのである。この思想的な混亂と、元祿元年末に發病して同二年冬まで彼を沈默せしめた大患が、原稿中絶の理由であらう。この點に關しての詳細は、中央公論社版の拙著「西鶴・評論と研究」下卷十五章を參照せられたい。「日本永代藏」にまして、この未完の續篇二部は荒々しい作品である。しかしこの三部作を理解することなしに、西鶴晩年の文學精神を理解することはできないであらう。

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com